子どもに対する作業療法

ー乳児期から就学までー

Occupational therapy for preschool children

★子どもに対する作業療法は特別な分野，という印象を持っている方が多いかもしれません．ですが子どもに対する作業療法は，一般的な身体障害や精神障害に対する作業療法と大きく違うわけではありません．

● 作業療法マニュアル「子どもに対する作業療法」は，一人でも多くの人が子どもに対する作業療法に挑戦をしてほしいという思いを込め，**「初心者にわかる」**をコンセプトに，乳幼児期（学齢期までの期間）への関わりに必要な作業療法の考え方をまとめました．乳児期から学校に上がるまでの時期に，作業療法士が関わる切り口として，1）家族のサポート，2）遊びのサポート，3）ADLのサポートを３つの柱としてお伝えします．

● 子どもに対する作業療法は，基本的な作業療法の考え方に発達軸を加えるところが特徴で，正常発達の知識を基にして，子どもの発達を支える視点を組み合わせるように考えます．年齢により目標とすべき日常生活レベルが変化するために，長期目標や短期目標の立て方が難しいと思われがちですが，ライフステージに沿って，障害があるために出来ない**当たり前の生活と経験を目標**として考えるようにします．

● 対象児の生活は家族の構成員の生活と共にあり，家庭内の人間関係に大きく影響を受けます．対象児の障害がわかるだけでは，子どもが健やかに育つ環境作りは出来ません．子どもは，家族とともに地域で暮らし，**地域の中で育つ存在**でもあるのです．家庭を取り巻く地域の状況もあわせて考えることが必要不可欠で，地域の他の場所で対象児と関わる人たちとの情報交換や連携もまた大切な仕事です．

● できるだけ早期から作業療法士が，家庭や他職種と協力して良質の経験ができるように関わることができれば，子ども達の生活環境を変化させることができ，**大人になったときの生活力**を引き上げることは可能であると思います．

一人でも多くの子どもたちが，良質の経験の機会を提供できる作業療法士に出会えることを願います．

Copyright 2014. 一般社団法人日本作業療法士協会学術部，All Right Reserved.

子どもに対する作業療法　大切にしたいポイント

作業療法 支援の視点

- 子どもの発達は,環境からの刺激に対して反応し,働きかけることで環境からその結果としての刺激を受け,経験となり,そうした積み重ねによってもたらされる.
- 子どもの作業療法は,このプロセスが適切に経験できるように介入すること.
- 子どもの発達を阻害する因子は,感覚・認知・運動・行為等の障害があるために,良質の経験ができないことであることを理解する.
- 発達する方向を,正の方向(成長・発達に伴って身につけるべきことを学ばせること)に導き,負の方向の変化は,引き起こさないように関わる.
- 子どもはいつか大人になる。その段階(年齢)で子どもが経験すべき生活場面を成立させるための支援が大切。日常生活を充実させる.
- 子どもが家族の一員として,家族とともに地域でのよりよい生活を維持し,継続できるようにすること.
- ICFを活用して心身機能・活動・参加・環境因子・個人因子の相互関係の上で評価すること.

★良質の経験を積み重ねることができるように早い時期から支援を行い,大人になったときの生活力を引き上げる

時　期	乳児期(生後12ヶ月まで)	幼児期(1～6歳)	学　童　期	青年期・成人期
支援のポイント	●母と子どもの関係をつくる支援 ●子どもの使えるからだ,使える感覚を育てる支援	●子どもが社会的存在になれる支援 ●環境を操作できるからだ,環境を理解し受け止めることができる感覚を育てる.	●現代社会で生きることができる知識の獲得の支援	●精神的な自立への支援 ●物理的(経済的)自立への支援

作業療法 評価

★対象の子どもを中心として,ICFの項目を漏らすことなく把握し,関係してくる家族や先生,地域といった,子どもの周囲全体への理解も深めること.

- ・情報収集:情報から,子どもと家族の様子をイメージする.
- ・面接:必要により,面接の形式の使い分けを行う. まずは人間関係を築くこと. 受容的態度で傾聴すること.
- ・観察:環境とのかかわり方,環境との相互作用を見逃さない. 観察する場面,観察の形式によって様々な情報が得られる.
- ・検査測定:実施しようとしている検査・測定が何を評価するものかを熟知しておく.

★評価結果を伝える際は,伝わりやすい言葉を選ぶ.
検査結果をきちんと理解していることが必須となる.
肯定的に伝えること.

作業療法の実際

家族のサポート

- 家族全体の幸せをサポートするスタンスを持つ.
- 親の訴える困りごとを傾聴する.
- 表面的に訴えていることの中に隠れている家族の事情をくみ取る。育児負担の軽減方法を一緒に考える.
- 今のやり方を少しだけ変化させていくことから緩やかにはじめるようにする.
- 今までのやり方を否定する表現にならないように注意する.
- 提案が,家族の誰かに負担が多くなるものにならないように.

遊びのサポート

- 豊かな遊びの環境をつくることは,子どもの心身の発達には欠かせない.
- 子ども自身が考えて,試行錯誤しながら遊べるようになる過程を見守る.
- 大人のやっていることは興味があるもの. 手伝いも遊びになる.
- 子どもの脳や体で起きていることを推察しながら,脳や体を発達させるように関わる.
- 小さなサインを見逃さない. 何を考えているのか,考えながら遊ぶ.
- 反応が出てくるまで待つ.
- 否定的な声かけは避ける. 共感する. ほめる.
- 大人にとっても子どもにとっても楽しいものにする.
- 一緒にやって子どもが「できた！」と思えるような課題設定にする.

日常生活のサポート

- 日常生活動作の獲得や活動の充実は,発達を促進し,育児を支援することになる.
- 子どもができることやできる方法を見つけ,生活の中で繰り返せるようにする.
- 子どもの様子をしっかり観察してから関わり,親の主訴を聞き,考える.
- 日常生活のできないことは,育児の悩みであり,家庭の生活の様子を想像して関わる.
- 関係者間の情報共有と意見交換,保護者への使える制度等の情報提供を心がける.
- 食事は動作や運動のみにとらわれず,広い観点で考える.
- 排泄は焦らず,根気強く,気長に関わる.
- 衣服の着脱を通して,服と体の関係を伝えることができる.
- 入浴や清潔の意識は,幼いころから習慣づけることが大切.
- 睡眠は生活リズムの基本で,子どもの覚醒状況の特徴を捉えておく.

子どもの生活を支える地域の資源

母子保健にかかわるサービス
- ◆母子健康手帳(通称:母子手帳)
- ◆妊婦健康検査や妊婦指導教室等
- ◆育児支援(保健師等の定期的な訪問)
- ◆乳幼児健診　◆就学時検診

支援の必要な子どもと保護者が通う場所
- ◆フォロー教室(市町村保健事業)
- ◆児童発達支援センター
- ◆児童発達支援事業所(児童デイサービス・母子通園等)※

すべての子どもが対象となる支援や場所
- ◆児童館　◆学童保育(放課後児童クラブ)
- ◆子育て支援センター　◆児童家庭支援センター(発達障害者支援センター,一般病院専門外来,等)

障害児が対象となる支援や場所
- ◆児童発達支援
- ◆放課後等デイサービス
- ◆保育所等訪問　◆専門機関での支援(発達障害者支援センター,一般病院専門外来,等)

その他　利用できるサービス
- ◆ホームヘルパー
- ◆短期入所(ショートステイ)

※平成24年4月1日より、子どもの支援が児童福祉法に一本化され、障害児童施設・支援事業が変わりました。JAOT 2012年8月号P46を参照して下さい。

Copyright 2014. 一般社団法人日本作業療法士協会学術部, All Right Reserved.